

長崎地名考

物産之部

15

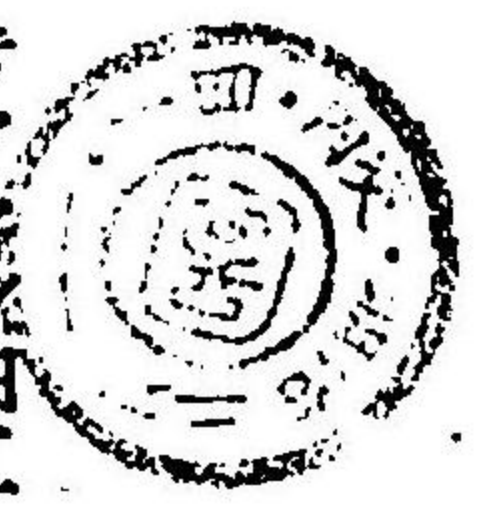
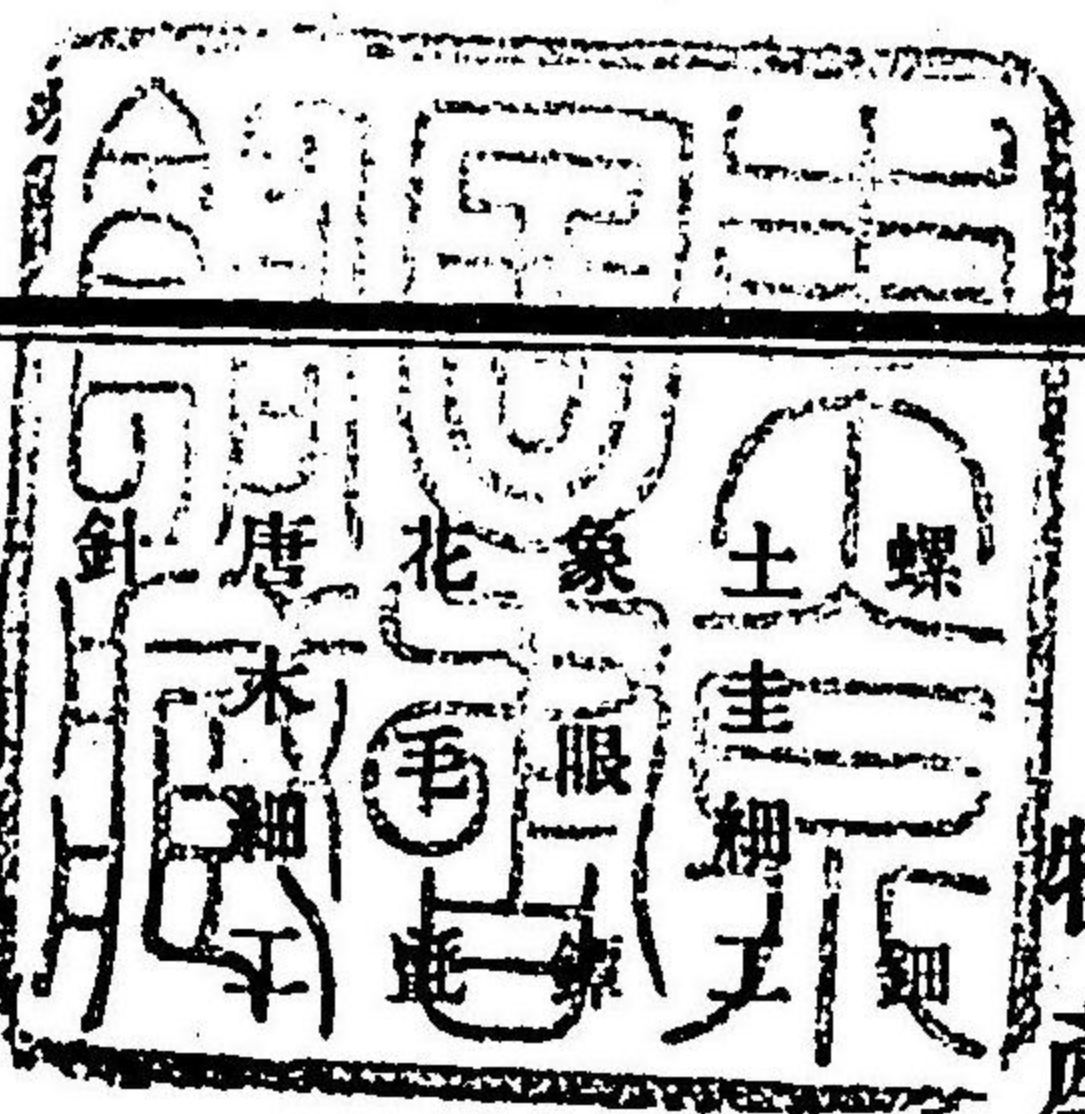
254

館書圖京東				
三	二 五 四		一 五	
冊	號	架	函	類門

長崎地名考附録目錄

物産部

南	橄欖	鵬崎	綿弓	花手拭	針	唐木	花	象	土	螺
瓜	膏	燒	絃							
西	茶	羊角	染唐	花	頭搔き	石	石	鏽	天文	眼鏡
瓜	膏	細工	紙	筵	指輪	火	印	物	測量器	細工
北	蛇頭	南蠻	線	盤	算	塗	青雲	唐船	石	硝子
瓜	石	菓子	香	紙	盤	物	石	大工	橋	細工
冬	即功	唐菓	像	莫大	唐風	唐硯	珠	竹	眞鍮	龍甲
瓜	紙	菓子	花	小	縫箱	細工	數	細工	細工	細工
コ	煙	善財	龜山	畦	皿	外科	唐風	玉	錫	キヤ
ハ	艸	餅	燒	袋	紗	道具	佛工	細工	細工	細工



長崎地名考
目錄
一

隱元豆	菜花類	唐菜	高菜	藥
シヤボ	ランボロモフス	南京芋	琉球芋	胡麻豆腐
テンプラ	南蠻漬	唐枇杷	橄欖樹	野菊
銀臺	阿蘭陀水仙	クハツクハツガユ	如意樹	大名竹
孟宗竹	明竹	方竹	鳳尾竹	カラクン鳥
カナアリヤ鳥	鶏家鴨豕	狒犬	鯰子	和斑猫
石龍子	獅子頭金魚	白魚	松子魚	コラムギ
カヒメ	海牛	鐘木	キタコ	煙草庖刀
鯛	鯉	鮪	地引鯛	煙草節
尻高貝	ヒルクヒ貝	和布株	麝香鼠	野牛
魯鷄	烏骨鷄			

以上百七條

唐船之圖

唐船の甲板部は荷物の
 三階あり
 荷物を上陸するの
 子船あり



長崎の海産物
 長崎の海産物
 長崎の海産物
 長崎の海産物

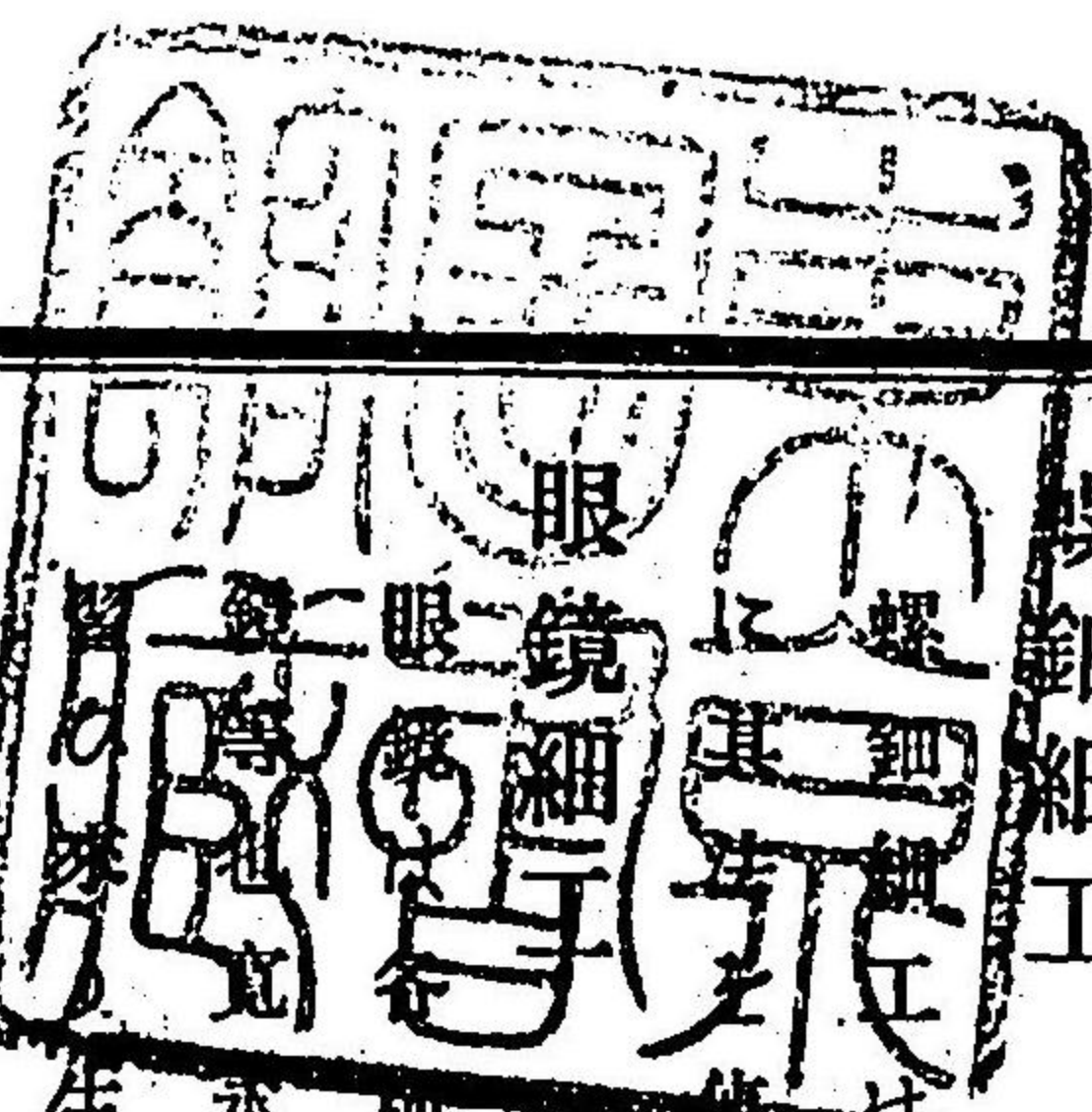


長崎地名考附録

長崎 香月薰平 著

物産部

螺細工



螺細工は長崎に年久敷在崎する唐人より生島藤七といふもの
 又青貝長兵衛といふ者も此法に精しこれを始とす
 種あり鼻目鏡、遠目鏡、虫目鏡、數目鏡、磯目鏡、透間目鏡、近目
 鏡、水の頃濱田彌兵衛といふ者蠻國に渡り於彼地其製法を
 生島藤七に教ゆ外國製の目鏡を造る始也藤七は三郎左
 衛門の弟にして百技に工なるもの也

硝子細工

硝子細工は最初來舶の南蠻人より法を傳へたるもの也其後精工

長崎地名考

物産部

安中氏藏版

となり切子金縁或は生類の形を模造す今魚町笠鉢魚類等は同町玉屋某といふもの、製する處にして最妙を究む硝子に用ゆる石は長崎近郷より出るを上好とす

鼈甲細工

鼈甲の細工は當地の特技にて元と唐傳也昔より今は細工最精功となり外國人大に好み職人あまたになれりその始め詳ならずギヤマン細工

ギヤマン細工は櫛笄并酒瓶、コップ、すへての硝子器物に人物草花さまざまの形ちを彫刻するをいふ南蠻人の傳也

土圭細工

土圭細工は寛永の頃在留する南蠻人より邑人に製する法を教ゆ後年時計師といふ者數名を置れ江府進獻の公用をなさしむ土圭に各種あり杖土圭、尺土圭、押土圭、管絃土圭、等也古記に唐國にては土圭を自鳴鐘と書く吾邦にては土景或は土圭と書く時計と書は

字韻に適はざるよしいへり

天文測量器

天文測量器に目尺、量尺、圓規、日晷、渾天機、星圖、天球、地球等也眞餘或は木製あり南蠻人の傳也

唐風造石橋

石橋を架するは他國にては稀也長崎も古昔は皆木橋也寛永十一年興福寺住職唐僧如定彼國の石工に命し本邑酒屋町に始て石橋を架す俗に是を目鏡橋といふ目鏡の如し石橋を架するは先づ梓といふものを造り疊み上げ方石數十を梓の上に擔ひあけ密に之を並らへて能く堅め如此次第に組上げ橋の形全く成るの後梓を迦して其功を収む長崎にて石橋を造るもの始めはみな唐傳也

眞餘細工

眞餘細工といふは種々あり香爐、花活、手爐、足爐、其外紫檀器物に眞餘の象眼を入等皆唐傳也

錫細工

錫細工は元祿の以前唐人町宿に居たりし頃錫細工の唐人ありて造りたる器物を賣出せしか後に清左衛門といふ者此細工を習ひ得てより始めり錫器に真鍮もて象眼雲龍其外を入る事に長したりと

象眼鐔

刀劔飾具鐵鐔に金銀銅の象眼を置く法は本邦にもあれど長崎にては勘二といふもの蠻國に渡り彼地にて其法を習ひ得て歸朝しこれを子孫に傳ふ勘二は最好手にして勘二象眼又は勘二鐔と人皆賞すこれ蠻流の象眼也此餘漢南鐔といふあり即ち蠻國傳也

唐金鑄物

鑄物は花活、香爐、大花瓶、手爐等皆唐風也道助といふ者廣東に渡り於彼地習ひ得て歸朝す後ち益精巧となり其業に達し世に奇工と稱す其後カメといふ女此業に巧にして其名世に高しかメの製品

唐船大工

稀也唐様の鑄物本邦に入りしは道助を始めとす
唐船の損所或は端船を造るは始め彼國の大工のみにてせしか後ち長崎にて唐船修理方といふもの出来てより大邑の大工にて製するなり承應二年七月當地にて唐船一艘打建る其船名を日鵬號と名付けたり

竹細工

唐風竹細工は斑文竹又は黒竹等を以造る曲簾、卓案、書棚、茶棚、籠、煙艸盆等也入郎平といふもの在住せる唐人より習ひ得て業とす

玉細工并造り珊瑚珠

玉細工の外に造り珊瑚を拵らゆるは唐傳也又た蠻人より教へたるもあり安藏市九郎といふものを始とす

花毛氈

花毛氈は草花鳥獸等を織入る寛永の頃來舶モール人よりその法

を傳へたり

石印彫刻

印刷の法は唐土元明清朝にて種々の法あり始め邑人某唐人より其法を習得たり其後印刷の傳書數種を持渡れり其法正しく本邑に傳ふ昔より名手と稱せらるゝ者世に絶えず蓋享保年中清水伯民といふ者清人丁書崑徐長行の二人に隨ひ能く其法を得て名手と稱せり是を始めとす

青雲石

青雲石は高濱村より出る其質美にして蒼黒なり硯及印材に用ゆ雲根誌にいふ長崎高濱村より出る青雲石は硯材の上級なりと

珠數

珠數は紫檀、黒檀、白檀、水晶、護神香、降神香、吹玉等を以造る唐傳也

唐風佛工

佛工は方三官といふ唐人を長崎にては元祖とす三官は福建道漳

州人也佛工の名手にして子二人あり皆父の傳を得る然れども佛工は其身を勞し其の心を用る事深からされは靈像の全き事を得ず愁ひ父の名を辱めんよりはと父死して後兄弟ともに佛工を捨て醫術を學ひ志を違す素より學才ありければ其業も又世に聞ゆ弟は殊に書を善くし草書に勝れたり方三官の作佛は本邑福濟寺本尊觀音の像也其長凡六尺容儀端正にして他の佛像に異なり此外同作のものなし福濟寺は寛永五年建

唐木細工

唐木細工は紫檀、黒檀、鐵刀木すへて唐國の木材を以て高案机、書棚、茶棚等其餘種々器物を製す唐傳也上好なるものは彼國にて製するものと異なる事なし

石火矢

長崎冶工某始め南蠻人より其製法を授る後ち大に其業進み行寛永年中以後官命により鑄造するもの數十門當港内外砲臺を始め

江府調進等皆本邑の治工にて製す官命の外猥に鑄造するを禁せらる長崎夜話艸に云石火矢の文字定りなし明朝萬曆以來のものなれば古名ある事なし百年以上長崎にて用ゆる文字ありこゝに記す

火銃 鳥銃 西砲 洋砲

唐書海外説話及び日本羅山文集に出つ
鐵砲を云ふ大文字を加へて石火矢とす
日本字林集葉に出つ
上同書に出つ砲石ハジキと訓す

塗物

塗物は堆朱、堆黒、屈輪、沈全、青貝、色蒔繪等の類をいふ是唐風のものとして藤七勘七といふ者唐人より其法を授りたり堆朱の製最巧み也印籠、根附、香合、盆の類を専ら製す近世黒川正英其法を得たり

唐硯細工

唐形硯の細工者唐傳にして彫刻の刀法種々あり近世黒川正英能

く其傳を得たり

外料道具

外料道具は南蠻人及蘭人より邑人廣瀬某なるもの其法を授りしより漸く世に廣まれり

針

針は各種あり寛永の頃に唐人の傳にして竹中某といふもの先代より此工業をなせり南京針といふて世人多くこれを需用す

頭搔き、指輪、銀鉛硝子細工

頭搔き、指輪等は銀鉛硝子にても造れり唐傳也今は邑人多くこれを造りて他國に出す

算盤

算盤は長崎にて製するは始め唐傳也其後職人の考を以て製す他國の製とは少し異なり

唐風縫箔

唐縫は貞享の頃唐人町宿に居たりし時より傳へ來れり當時は専ら婦女の工業なりしか其後在勤奉行より江府進献の事ありしに後には年々と調進の事となり本邑の職工命を受けて仕立しなり夫より此職に就くもの多くなれり

皿紗染

皿紗染の法種々あり南蠻人より法を傳ふ人物花鳥の染形又は金皿紗、書き皿紗等也金皿紗は至て美麗なるものにして江府進献品の内なる書皿紗といふは様々の模様を形に押さすして書きたるものは是又巧みなる業也

花手拭

花手拭は唐傳也金巾木綿等に花鳥唐艸其餘種々の模様ありいづれも藍染にして手拭のみに限らず衣服の料にも充る後には却て唐商の注文夥敷此職工は紺屋町に數名あり是を里俗は唐人紺屋といふ本邑にて染たるもの販唐の後數度水に入るゝとも容易に

剥落るなしとかや又彼國にて染たるもの長崎の水に入るゝとも是又剥落る事なしこれ水土の異なるによれるものなるへし

花筵

花筵は長崎にて花御座といふ蘭を五色に染め機にかけて織る様々の模様あり長短望にまかす根元は暹羅人の傳也

鬘紙

鬘紙といふは始め邑人某なるもの造出すもの也二尺より三尺迄廣く漉く色白ふして後年に至れども虫の入事なし手形證文等の用紙に最も良し

莫大小

莫大小は正徳年中蘭人某か其抱入置たる遊女に教たるより次第に學ぶ者多くなり後には足袋襦袢等木綿又は眞糸にて漉く在館の蘭人専ら需用し他にはいまだ求めるものなかりし

哇足袋

哇足袋の製し方は始め唐人より傳へたり此地にて女子多く作りて他に出す

綿弓絃

綿弓絃は唐傳也萬吉といふものを根元とす是も元祿以前の事也始めは牛の筋を以て製せしが後は鯨の筋にて造れりこれより其法世に廣まれり

染唐紙

染唐紙は青紅黃鼠色水色桃色又は地紋を入れ又は切箱砂子唐紙等の種類なり本邑にて唐客の直傳を受たるもの一人の外になし其後又一人出來たり寶永正徳の頃迄兩人あるのみ也

線香

線香は始め明人五島一官といふもの長崎に年久敷住居せしが一とせ福州に渡り彼地にて其法を覺へ來り當地にて始めて造り出せり此流傳あまたに分れたり唐様の線香を製するは是を燭矢とす

一官は父子同名也香を製するは子の一官なり父子共に歸化す子の一官は後に清河久右衛門と改名す此者は鄭芝龍の朋友にして芝龍といふものに福州に渡れり

像生花

像生花は蠟花又は通艸又ハ細花の種類あり始め唐傳也精好なるものに至ては生花と比へ見るに異なる事なし通艸といふは本邑にてはダラの木といひ俗に山灯心ともいふ

龜山燒

龜山燒といふは始めは德利水瓶等の類のみ燒しものなり文化年中より染附物を燒出す繪樂は唐國に注文し下繪は當時名ある畫工にて唐客の筆もあり唐國より持渡れるものと眞偽分ち難し始め水瓶の類を燒し故此燒物瓶山といふ後是を龜山と文字を附す龜山といふは地名にもあらず地名は大窪といふ後年在勤奉行より毎年江府へ進獻の物にのみ燒出す故賣物を專とせず賣物に出

そは次品也

鵬崎焼

鵬崎焼といふは嘉永年中稻佐鵬崎にて蒲池子明といふ者製せり子明は詩文に長し陶器に附するものは他人の詩文を附せず皆自詠也賣物にするものにあらず自己の樂として製する故世に少し最も佳品なりこれに銘するに以唐土蘇州土製とあり

羊角細工

羊角細工は羊の角を煎て薄く紙の如くに製したるものにして燭臺或は燈籠の風覆に造る也火影鮮明なるもの也唐傳にして文政の頃迄其職工残りたりと其後此業を心得たるものなし

南蠻菓子

南蠻流の菓子は始め南蠻人より傳ふ元和の頃伊藤小七郎といふもの有り此者蠻流の料理并菓子の製法を習ひ得たるをはしめとす夫より今以流傳し其後又蘭人の教へたるもあり其類多しと雖

も大概をしるせば

- ハルデ ケジャアド コンベイト アルヘル カルメル
- パン フベリヤス パアスリ ヒクヨウス フブダウス
- タマゴソウメン ビスカート 花ボール 丸ボール
- カストルボル

此菓子をかusterといふは訛言也本名カストルボルといふ此菓子は天正年中長崎に渡航せし南蠻人の傳にして邑人これを授り夫より流傳して今は他國に於ても製すと雖も長崎にて製するものとは品位大に異り佳味と賞すへきものにあらす他に製するものは堅くして風味よろしからず此菓子は和らかにして綿のごとく口に含むに舌を勞せずしてその味ひを覺へ風味の淡白なるを妙とす此菓子は蠻國の内にカストルといふ一小國あり此國にて始て發明したるものよし也又ボルといふは菓子の總稱にしてカストル國の菓子

といふ蠻語を其まゝ用ひたるもの也此外花ボール丸ボール等の菓子もこの類ひ也

○柏亭羅をもらひて

半顔居士

其名さへ五三焼てふかすていら桐の箱とはよくはまりたり

唐菓子

唐菓子の製數種あり當地に久しく在住せる唐人後に歸化して其業をなす今に残りたるもの大抵左のごとし

- 香餅ヒンパイ 大胡麻餅オホアヲ 砂糖鳥サトウトリ 羅保衣ラホイ 火繩餅ヒツナ
- 胡麻牛皮アヲ 玉露糕タマロウカウ 賀假頭カカウ 凍羊糕トウヤウカウ 双稱ソウショウ
- 芝蔴片シマカ 太史餅タイシ 糖棗トウサウ 雪棗セツサウ 糕干カウカン
- 蛋糕タンカウ 唐餅タン 鹿餅ロク 蜜長羔ミツナガカウ 砂仁片サニ
- 鹿稱糖ロクショウ 連環糖レンヅウ 鹿餅ロク 蜜長羔ミツナガカウ 砂仁片サニ

月餅

月餅は俗に明月餅といふ其形圓し麪粉にて製す餅の内には種

々の具を入れ豕油にて揚るものと一種精進にて拵らへ胡麻の油にて揚るものとの二種あり

○ある家の二階にて月見の菫をひらきたるにゐるヒ名月餅といふをすゝめければ

高殿や月をのせたる塗小盆

青松園

雲片糕

雲片糕は唐國にては雪片糕と書く其色白しこれに二種あり一種ハ畫彩あり又一種は畫彩なしいづれも米の粉に砂糖を加味す方形の少し横長きものなり至て薄く幾枚も重ねたり一枚宛へがして適宜に食ふもの也畫彩の方は一枚毎に花鳥の圖あり

牛皮糖

牛皮糖は又求肥とも書く榮粉砂糖飴の三味を胡麻油にて和したるもの幅壹寸五分許り長貳尺餘是に胡麻を附て紙の如く延たり粘せざるを妙とす用る時は意に隨ひ引延して切る

香沙糕

香沙糕は俗に口砂香と書く此菓子元祿の頃長崎に久しく在住せし唐人の愛妾にウメといふ女ありこれにこの菓子の製法を教へ置しを後人に傳へたるより専ら拵らゆるものにして他國にこの傳なし此菓子は米の粉に砂糖を加味せり之を食ふに舌の上にてざらざらとする氣味ありと思へば忽ち解け砂糖の風味のみ跡に残れりこゝを以て香しき砂と文字にはかけりその形は一輪の白梅の如くに打出す也これは始めウメといふ女其法を授りたれば其名に因て菓子の形ちとせり

善財餅

善財餅は在館の唐人これを拵らへて賣る本邦にていふ汁粉の製に異ならずたゞ團子至て小さく彈丸の如し善財餅といふ名を唐人に尋ねしに此名が出る處は佛説にある善男子善女人或は善財童子など又は善財善財といふ如く此製法の美なるを褒めかくは

名付しものなりと物語りせしよし古老のいひ傳へたり唐人の年々冬至の節を賀するものにて此時必らず善財餅を拵らへ神佛よ供し人にもこれを贈る長崎にて唐譯官の家にては冬至の祝ひとて善財餅を作り親族知己に配り或は此夜宴を開くを例とすこれを見覺へ看板をかけ此を商ふもの多し

橄欖膏

橄欖膏は一名青菓膏ともいふ生橄欖に諸藥を調合して製したるもの酒毒を解す第一唐傳也

茶膏

茶膏は最良の茶に加藥して製す鬱氣頭痛船酒の醉に大に効あり其形落葉の如くにしたり是亦た唐傳也

蛇頭石

蛇頭石は蘭人の持渡れるもの也漢名吸毒石又はスランガステルともいふ獸虫の咬たる疵口に此石を附るよし毒氣ある處には吸

附て離れず毒を悉く吸とれば自ら離るこれを乳汁(乳汁なければ清水)に浸せに毒汁を吐出すを更に清水にて能く洗ひ日に晒し貯へおくべし再三月ふるに其能失する事なし他國にても製すと雖ども其色黒くして正真のものにあらず本邑醫椿林氏にて製するもの蘭人の直傳にして色白黒く斑所々にあり

即功紙

即切紙は金巾の切れに調和したる藥物を一面に引き機にかけ日に晒し乾したるもの也切疵頭痛手足の痛み獸虫の咬たる疵口等に切りて附るに痛み治せざれば離れずこれは蘭人の傳にして本邑醫吉雄氏の祖其傳法を得て専ら製す他國にても製するものあれと藥味違ふ故に其功薄し吉雄氏にて製するものは却て外國人の需用多し

煙草

煙艸又の名南蠻艸又は煙酒ともいふ慶長四年南蠻人種を持來り

て長崎馬場郷に植るこれ本邦に煙艸の種の入りし始め也是より普く世に廣まれり煙艸の始め亞米利加國に出づ佛蘭西人其種を得てより歐羅巴州に入る始て此種を得たる地をダンバゴといふ因て名附るとかや後訛てタバコといふ唐人は淡婆姑と書く蝦夷人はタバコといふ一度この煙を吸ふ人は再び忘る事能はざるより又相思艸ともいふ煙艸の能毒を記せば左のごとし

能

煙を吸ふては鬱氣を開き氣力を益し山嵐瘴氣を避け冷濕を散すし食を消す葉を書笈に入れ置けは蝨虫を除く脂は蛇毒を解し虫齒を堅くを金瘡に葉を付て血を止む内障まごころの眼又は青盲あまめくらにもよしといへどいまだ實驗せず

毒

多く煙を吸へば口中を損す又た上氣耳鳴に忌み眼病に禁ずべし但虚眼には忌すと雖も多く吸ふては相火を助くる故仇とな

るなり常に多く吸ふ時は呼吸を暴くして血脈進數する故壽命を減するの恐れあり況や壯年血氣盛なる人をや痰喘人忌むべし勞瘁の病ひに堅く禁すべし胃火を生じ心熱をさかんにす

煙艸毒を解する方

麥門冬 紫蘇子 瓜蒌仁 枇杷葉 甘艸

右五味を等しく合せ常の如く煎し渣を去り砂糖壹兩を入れて腹す尤妙也(以上長崎夜語艸に擧る説也)

南瓜

南瓜ハ蘭語にてボウブラといふ此種始は唐土日本ともに亞媽港呂宋等より傳りたり長崎には天正年中より農家に作りて生計の助けとす本草綱目に南瓜は毒ありて益なしと見ゆ昔ハ恐れて食する人少し後ハ諸國に流布し人毎に食すと雖も害なし南瓜に毒ありといふを深く考ふるに皆肉食牛羊猪肉等を加へ煮て以て甚た過食し又は熱酒を飲むによつて食滯諸病を生したる時これ南

瓜の毒なりといひて肉食酒飲の過たるを察せず農家にては南瓜一味或は麥粉餅を合せ煮て喰ふと雖も淡泊なる故に過食の咎めなく病を生せし事を聞かず本草綱目の頃迄はいたた南瓜の性詳ならずすへての菓の類ひは形ちの小さきものにはかあらず其氣味強く毒あるもの多し其形大なるものには却て氣味弱く毒なきものなりといへり

西瓜

西瓜ハ元西戎の地より唐土に入り吾邦には始め九州に傳へ長崎にては慶安の頃より唐人種を持來りしより始る是より肥後薩摩天草高來郡などに廣まり京都よてハ寛文の頃より關東にてはまた其後に種を得たり

北瓜

北瓜は始め南蠻の産也夫より唐土に入又長崎に傳へたり
唐冬瓜

唐冬瓜は長崎にてハ唐瓜といふ始め唐國より種を渡す至て長大にして用ゆるハ小口切にす大きなるハ差渡し壹尺餘長貳尺より三尺以上あり綠色を帯ひたる上に白粉あり六七月の頃能く熟す
コヘント

コヘントといふは蠻國の菜類也南蠻人種を渡す長崎處々にて作る外國人食用に充つ

隱元豆

隱元豆は長崎にてハ八升豆といふ此種は承應三年唐僧隱元來朝の節持來りて本邑興福寺の内に作てこれより處々に流布す

菜花類

唐國より寛文の頃菜花種々を渡すうち天茄、芥藍、金紫菜等の類ハ却て彼國の産より上好なりとて在館唐人多く求て食用す

唐菜

唐菜といふは唐國山東にて産する菜をいふ常の菜類より一種異

り味ハ又雙らふものなし長崎の地質に能く適し年々夥敷作る此種他國に移すハ必らず變種す適々培養の功を遂ると雖も味ハ甚劣れり長崎にても十善寺郷にて作るものを好しとす味ハ甘美にして和らかなり菜の類本邦其數多しと雖も此菜に及ふべきもの更になし

高菜

高菜は漢名春不老といふ始め唐人種を持來りて植ゆ此地ハ能く適す他國の地には應せざるにや變種す唐菜とは味ハ異なれど菜類の盡んどする春の末より多く出つ鹽漬にし又は油に揚げ煮て食するに高味なるもの也

藥

藥はフタナリといふ是を水にひたし置き毎朝水をかへて後芽を出すを食用にする也フタナリは綠豆といふ也此製し方はフタナリを桶に入れ水に漬け日當りの能き所に一日置き其夕方に至り

斗桶に入れ水を去り上に藁を多く掩ふと始のとき毎日一
七日許りにして漸く芽の長さ一寸許り出るを度とす色白ふして
美麗なるもの也フタナリ豆一升にて凡ろ藁一斗程になるもの也
ジャボ

ジャボは本名紅袖といふ外國人は紅婆羅門子といふ長崎にては
ジャボン又ザボンといふ寛文七年瓜哇國舶主周九娘此種を携へ
來りて邑人盧氏に授く庭に植て後八年を経始て華實を結ふとい
ふ形ち大にして團し柑の類也肉多くして白紫の二色あり紫色の
方最甘味なり他國にはなし

ナンボロモフス

ナンボロモフスといふは詳ならず蘭人種を渡すといふこれを出
島に植ゆ柑の類ひなりと

南京芋

南京芋の天正四年蠻人種を渡す是より世に流布す

琉球芋

琉球芋は赤白の二種あり皆同類也赤芋は勝れて甘くして皮薄く
紅色にして肉甚た白し琉球芋といふは内外共黄色にして甘み薄
し元祿の末琉球國より薩摩に種を渡す夫より長崎に渡るこれよ
り所々に流布す農家常にこれを糧とし凶年には最上食とす脾胃
を補ふ功あり寒地には菜とると雖も肉少く味薄し唐人は是にて
酒を造り又水干して餅を造る長崎にても酒を造り又葛の代用に
製し或は菓子をも造る也

胡麻豆腐

胡麻豆腐は元祿の以前唐人町宿に居たる頃食用として拵らゆる
を見覺へ皆人拵ゆる事となりたり亦た一の佳品ありとす
テンブラ
テンブラは唐傳也小海老又は魚の内にて製するをよしとす尤唐
麻油にて製すへし此餘の製は皆佳品にあらず

南蠻漬

南蠻漬は蠻人の傳也小海老又はペンツシ魚を好む此外の魚類の骨のとろけ悪し

唐枇杷

唐枇杷は吾國の枇杷よりも葉長く廣し實は甚た大にして味至て甘し唐人種を持來り館内に植しより所々に流布す

橄欖樹

橄欖樹は霜雪に堪へざるもの也始め唐人種を持來りて崇福寺に植たれど後枯たり其後樂園に植へたるもの成木して實を結ぶ腹痛食傷上氣の病に是を煎し服すればその氣を散し病を治す

野菊

野菊の花黄にして至て小輪葉も又細し秋の末より冬よかけて盛るとす山野或は川岸等に自生す此花を摘み胡麻油に和し貯へればもろくの腫物又は毒虫に刺れ犬猫にかまれ又ハ切疵に付て

銀臺

痛を去り疵も治す又ハ風邪頭痛に煎して服すれば熱を發散し病深く根に入らず如斯功能あるもの也此野菊ハ他國にては見る事なし寒中花の盛を見るも珍らし長崎の地に限るもの也或書に非^ニ雞兒腸^ノ又非^ニ野菊^ノ即野生單葉菊花也とあり

阿蘭陀水仙

銀臺は水仙の一種也始め唐人種を持渡れり此種今は山野處々に散りて繁生す銀臺と水仙とは其別分ち難し水仙は根圓くして花の藥亂る是以て別種とす銀臺は婦人乳腫又は齒痛頭痛等に研り紙に貼して張るに痛みを止め早く治す其餘藥効あり

阿蘭陀水仙といふは花黄にして細く葉も又細長くして根圓く小なり葱のごとし蘭人種を渡す

クハツクハツガユ

クハツクハツガユは方言也ソソノイゲといふ至て成木するものに

して葉はアヲキの葉の如くにて薄く和らか也枝に刺あり實は瓊盆子の實に似たり熟すれば薄紫色に黄色を帯び味甘くして仁あり仁は辛味ありて舌を刺す此木は始め唐人種を持渡れり

如意樹

如意樹は其葉桐に似て成木するものなり夏黄色の花を開き秋實を結ふ大きき豆の如し炒りて食ふへし漢名梧桐和名アヲキリ始め唐國より種を渡して當地今魚町某宅地に植ゆ夫より此種所々に流布す

大名竹

大名竹といふは一種のもの也葉和らかよして長し八九月の頃笋を生す長大にして味よろし但皮を去り水に浸し置て後煮て食す浸されば苦味あり長崎にては始め唐國より種をとりせ藥園内に植るを始とす

孟宗竹

孟宗竹は始め唐人種を持來りしを馬込郷船藏の近地に植るこれ本邦にこの種の入りし始め也是より世に廣まれり

明竹

明竹は又一種のもので竹の節長く肥へ葉も大にして厚し此竹夏に笋を生す食するに大名竹のことし唐人種を持來れるを藥園に植るを始とす

方竹

方竹は始め唐國より種をとりこれを藥園に植る竹長大ならず初生は竹の幹色黒し長するに随ひ方形をなす他にはなきもの也

鳳尾竹

鳳尾竹は長三四尺に過ぎず葉細長く鳥の尾に似たり唐土より種を取寄せ藥園に植る

カラクン鳥

カラクン鳥は異雜也始蘭人持渡りて生息す本名カルクフーンと

いふ食用に充つ坤輿外記に雞あり大きき鵝の如く羽毛華彩味最
佳也吻口に鼻あり象の如く伸縮すとなり長崎にて生育するもの
ハ皆外國人の食用するもの也

カナアリアヤ鳥

カナアリアヤ鳥は始め蘭人持渡れり是よりその種あまたになり他
國にも傳へたり唐人蘭人需用多し

雞家鴨家

此三品は浦上村に多く生息す唐人蘭人の食用に充る故に此一村
蓄養せざるはなし適宜高來郡島原又は五島より鶏を多く出すと
雖も肉堅く味薄くして食用によるしからす一端當村にて養ひを
加へたる後食用とす

狎犬

狎犬は始め南蠻人の持渡りしより其種多くなりて所々にあり長
崎にてハ狎犬といふ其犬の上好なるものは形ち小くして毛深く

鱻子

手足短く耳大きく顔異相なり如此一身揃ひたるは蘭人唐人價を
論せむ需用す

鱻子は野母村にて製するもの最上好なり他にても製すと雖もと
品位大に劣り久しく保つ事を得すこれ當所の名産にして此に冠
たる所以なり

西道仙翁の説に曰く

鱻子の製造は延寶年中高野勇助といふ人製造せしより世に知
られたり今長崎鱻子と云ひすして野母鱻子と稱ふるハ其魚野
母海に出るものを上品とするを以てなり其由來如左

○嘉良壽美記

嘉良壽美者。長崎名産也。一日高野作重。來詣余曰。僕祖先高野元右
衛門者。肥後八代人。延寶年間。移居長崎萬屋街。以魚商興家。其男曰
勇助。喜製海物。供食用。當時製鱻子喚嘉良壽美者。蓋以其形類唐墨

也。酒客嗜之。爲下物。勇助游大坂。試食之。製法粗惡。不適口。勇助百方經驗。遂捕鱸子。藏置日久。曝乾。以爲脯。其味極美。始得適衆口。性味非鱸子之比也。於是大博世評。都鄙爭購之。鱸出野母海者爲上品。故稱之野母鱸子。今不曰鱸子。而曰鱸子者。依舊慣也。勇助正德二年。呈之長崎。奉行駒木根肥後守。大岡備前守。兩守大賞之。即獻之幕府。爾來以幕命。至每歲獻之。附以燈節及錫。特賜年俸銀百目。以爲常。自正德二年。至慶應三年。七世。凡一百五十有六年。如故。近時製之。以身業。競起於各地者。實勇助之力也。今欲刻其事于石。以表爲嘉良壽美元祖。敢請記之。余美其志。即書所聞。以其請云。明治二十二年十二月九日。賜琴石齋西道仙誌。

和斑猫

斑猫は俗にダイダウトホリといふ色瑠璃にして美なり

石龍子

石龍子和名トカケといふ長崎の地に多し

獅子頭金魚

金魚の類多しと雖も獅子頭の魚は他國には稀なるもの也此魚の頭世にいふ獅子の頭に似たり形ち長からす肥て圓し鱗白又は赤きわりて金色を帯ふ鱗廣く尾も廣く三つに切れたり常魚よりは價甚貴し

白魚

白魚は浦上山里村と淵村の境梁川にてとる此川は流れ清くして深からす川中所々に小石を壘み上げたる所に納屋を建て業をなすもの居れり網は蚊帳の如く四手に竹を組み緒繩をつけ魚の集る所に網を卸しれき時をはかり引揚げ魚を杓にてすくひとる此魚は二月彼岸の頃までを盛とす夫より後は魚も多からす又味ひも薄し年毎遊人來り河原にて宴し魚を調味す他國にて白魚といふはチリメン。小アユ。サノボリ。アマサキなどに類す筑前の白魚は凡一寸はかり腹中に小黒き點七つあり梁川の魚は甚た小にして

身幅一分はかり長七八分に過す形ちメダカに似たれど又異なり
躰の内は透通り一つの黒點腹中の腸あるをみるのみこれ煮れ
は潔白にして雪を欺くこれ白魚と名付る所以也梁川の白魚の味
に及ぶものなし

○梁川の白魚を

百華園流芳

春風にぬるみし水もなみの花とちりてうかへるやなの白魚

○梁川に遊ひて

足立正枝

うち散りし去年のみゆきや成つらん梁瀬の水にひるゝ白魚

松子魚

松子魚は他國には稀也大きき三四寸其皮堅くして六角の鱗あり
左右の鰭の脇に長き針出たり食するには茹て後鱗をとる肉白ふ
して油薄く佳味なるもの漢名不詳

コナムキ

コナムキといふ魚は頭に突出たる肉ありて異様なり長一尺五六

寸より短きもあり味美也

カヒメ

カヒメといふ魚は鱧の類ひ也漢名犂頭鮓といふ肌は鱗かまのことし

海牛

海牛和名うみすいめといふ物身鱗あり黒黄色を帯ふ背ありて尖
り長し食用によるしき魚なり

鐘木鱧

鐘木鱧は漢名雙鬚鮓といふ俗にカセノフンといふ長五尺ばかり
肉和らかにして多く甘美也

キタコ

キタコといふ魚は其頭蛇に似たり黄色にして黒點あり形ち鱧の
如し肉白ふして味美也

煙草切庵丁

此魚の名は長崎にての唱へにして實名不詳其形實に煙草切庵丁

のことし脊の色青く腹の方次第に白ふして奇麗なる魚なり大坂
尾ヶ崎にてハ鏡魚といふ

鯛

鯛は港外伊王島其他所々にて漁まるもの少なからずと雖も茂木
よてとる鯛は千々岩灘の荒海よて生したる故肉肥へ油薄くして
味最佳美なり此魚は久しく貯ふに堪ゆ故に大饗應には必らずこ
れを得ることゝす價も他より高價なり

鯉

鯉ハ野母村の漁民數十里の遠海に出て漁す同村に納屋を建て猥
に他の業をするを得も多漁の時半は鯉節に製し半を長崎に送る
生魚の味他に勝れて美也

鮪

鮪は五島にて漁するものは俗に五島鮪又はマクロともいふ肉赤
く油強くして佳味にあらず港外高鉾島近傍にて漁する鮪は是と

同種のものにあらず肉色薄く油薄く切り小口縮み縞あり是をち
りめん鮪といふ最も美味也

地引鰯

地引鰯といふは稻佐崎又は船津浦の漁民港内にて漁すこの魚油
薄く肥へたり他の鰯と同等の物にあらず

鯉節

鯉節は野母村にて製するは別種にして土佐節より肉肥へ油も薄
し他の製の及ぶものにあらず

尻高貝

尻高貝は形ち拳の如く大き貝也少なるは鷄子の如し煮て食ふま
た貝に穴を明け佩物にするも可なり

ヒルクヒ貝

此貝は殻色淡黒にて其横に長き肉出たり伸縮すこれ口なり大き
さ手掌のことし他には稀なり

和布採

和布採は二三月の頃いつる長崎近海にありこれを採るには長さ竹の竿の先に鍵を結付海底にあるを引切りてとるなり取揚たるもの皆その根に石の付たるを切捨熱湯を灌けは至て和らかになる是を能く敲けは粘する事膠のごとし醤油に酒を和し飯に混して食ふまたその干乾かして貯へ置時は熱湯を灌き敲けはまた元ののごとし甘美なるもの也

麝香鼠

麝香鼠は漢名香鼠といふ明曆二年咬嚙吧船より持來れり形ち常の鼠の如し毛色も同したゞ背長く尖り香氣甚し豈目見えす夜出て啼其聲黝のごとし床下或は水走りの下に住む此鼠は長崎の地のみに限る他國の境を越へては更になし

○麝香鼠の説

東奥 巴 山

肥前國長崎に麝香鼠といふものあり走り流しの溜りを樂しみ

椽板の下を栖と定む鳥羽玉のしつけき夜半暗き方よりツンツンと音信るは秋を告る虫よりもさかしく雪になくみそさゝひよりいと閑なりきさはそのなす處を閱するに濕生の小虫を餌とし五穀を食らす器財をそこねず居る所天井梁を望まざれば岩橋の思ひをかはす恥しの森の恥かしき筆のすさびもおのづから巢又引まどふ工みもなしされや汝をもてつらく世のありさまを觀するに物として多く餌の爲に一生を誤る大魚得かたしといへども貪るを以て祿に死す越の爲に吳に釣られしはるの餌の美色によれば也又文王の釣を垂る翁に得られしはその餌の空敷をもつてなり汝因みに唐土より渡り膝を世の卑きに容れて食らま其身に麝香の臭きを忘るゝにより味噌の味噌臭く書物讀の書物嗅きに異なりとて犬猫狐もこれによみしおのづから害を加ふるに忍びず我朝に鼠の同者あれどもとより汝官祿の望なければ地獄升落しの難を聞き嫁入の行列に役せ

らるゝ事なく唯天のおのれに與ふるを守りうの志淡々にして
 いと廉なり嗚呼悲哉秦の宰相汝をもて威偶なさは天下の民を
 撫養ひなとか書を焼き罪を殘さむ去來曰汝筑紫に住馴てこと
 國に行かすとのみ其旅行を擧るにいとまわらず予しばく此
 境に旅寐し初雪のまなく消て又雪の夜四方静りてつれく
 るまゝ筆を採て汝をよみすしかはあれと寸善に尺魔ある世は
 何事も頼むべからずまづ近來麝香猫といふものゝわたれば油
 斷は大敵の俗語をおもへたゝ堅く其嗅きを守りてその嗅きに
 誇る事なかれ

雪ふけて麝香ねすみの匂ひかな

野牛

野牛は和名にして漢名不詳羊の類ひ也唐人専ら食用とす稻佐又
 の浦上村に多く蕃養す能く人に馴るゝもの也白毛にして和ら
 也姓温き物なれば寒中に嗜むものとす

魯鷄

魯鷄といふの鷄の至て小き物にして鳩のことし長崎にては矮鷄
 といふ種類多し形ちの大きなるゝ次品也其形ち尾は後又垂れ蹴
 爪のあるは下品とす尾は上に立ち蹴爪なく足短くして地を走り
 たるを上品とす上好なるは稀也外國人大きにこれを賞美ま白鷄
 を最好ひ也諺に八分八切れ八拾目といふ是はその丈け僅八寸冠
 八つに切れ重さ八拾目あるものをいふ之れを名鷄とす養ふに小
 鳥のこどく常には篋に入れ座右に置きて見ものとする他所になき
 鷄なり

鴈骨鷄

鴈骨鷄は全身白毛なるあり又黒斑あるもあり冠り足どもに黒色
 を帶ふ此卵の補虚の佳品にして大に功あり價ひ常卵に倍す
 以上

虎與號發行書目録

足立正枝著

新撰 軍歌 日本武尊

定價金二錢 郵税金二錢

此書は勇壯快濶風に日本勇士の武魂を顯はし玉
ひし日本武尊の傳記を軍歌にせしものにて先般
皇太子殿下に献上し忝くも瀏覽を賜はり
しものなり

足立正枝著

新撰 軍歌 鎮西八郎

定價金二錢 郵税金二錢

此書は保元の亂に内國を逃れ離島琉球國を征服
したる英傑鎮西八郎の傳記を軍歌に作りたるも
のなり

足立正枝著

新撰 軍歌 濱田彌兵衛

定價金二錢 郵税金二錢

此書は長崎の剛士濱田彌兵衛が台灣に渡り英人
を懲したる愉快なる傳記を軍歌に作りたるもの
にて弱肉男子の膽を塞からしむる傑作なり

足立正枝著

新撰 軍歌 曾我兄弟

定價金二錢五厘 郵税金二錢

此書は裾野の露と消えて其名は富嶽より高き曾
我十郎同五郎の事蹟を編みたるものにて憐れに
も亦た勇ましき軍歌なり

黒川潮著

長崎軍歌

正價金五錢
郵税金二錢

卷中所載○長崎公園四季歌○ひとめぐり歌○愛郷歌○長崎商人歌○長崎婦人歌○長崎少年歌○長崎高等小學校歌○長崎高等女兒小學校歌○長崎尋常小學校歌○長崎尋常女兒小學校歌○鎮鼎尋常小學校歌○校名盡歌○梅香崎招魂場歌○佐古招魂場歌

長崎尋常師範學校梅村久磨著作

圖畫教授法

定價三十錢
郵税二錢

此書小學校教員の授業上必ず携ふへし

故人長川東洲先生著

日本外史文法論

定價廿五錢
郵税金二錢

早稲田文學の評に曰く 日本外史の講義評論に長したりし故長川東洲氏が遺稿(中畧)日本外史に關する限は詳に修辭上の美を發揮せり案するに一を知りて二を推すの才あるものに取ては此書恐らくは日本外史文法論たるに止らずして一種の修辭論抄なくとも叙事文法論たるに適すへし間々左氏司馬氏の文と外史氏の文とを照論すいづれも多年咀嚼の果玩讀すべきもの多し國民の友の評に曰く 長崎東洲先生は山陽に殊に日本外史に私淑せる者故に其著はせる讀外史餘論、國史論贊評點、日本外史文法論等みな觀るべきなり殊に後者の如きは外史中に於ける着

筆の妙を指點して頗る盡せり文章には三たひ眩を折たる人と謂つへし

精美の評に曰く 斯書ハ半紙本ニテ四號活字ヲ以テ鮮明ニ印刷シ體裁頗ル宜シ(中畧)其議論ノ精密ニシテ能ク外史ノ蘊奧ヲ發揮シタルハ這翁ノ獨特ノ長技ナリ五百年ヲ俟タズシテ此揚子雲ヲ得タルバ山陽先生亦應ニ地下ニ欣然タルベシ

畫伯劉貞徳著

新式毛筆畫手本

木版美濃紙
全七十二枚

- 自第十二 花葉 自第十三 虫類
- 自第廿六 鳥類 自第廿七 魚類

壹枚金壹錢五厘 ○全部九十錢 ○郵税六錢

自第四十九 獸類 自第六十一 人物

本書ハ畫學教授ヲ以テ熱心ナル先生ノ編纂筆鋒豪放縱橫加フルニ初學練習者ノ便ヲ圖リ運筆ヨリ漸々形体ニ至ル其筆者ノ注意周到綿密ナル恐ラク坊間其比ヲ見ルコトナケン

畫伯劉貞徳著

新式鉛筆畫手本

全七十二枚
近刊

測量師入江英編纂

長崎縣管内精圖

雁皮紙石版摺
全壹部
定價金卅五錢
郵税二錢

- 附 近縣里程表 各地航海哩表
- 近島海上哩表 近郷里程表
- 縣内町村名 長崎市町名

測量師入江英編纂

佐世保港市街圖

雁皮紙石版摺
全一部
定價十五錢
郵税二錢

虎與號書店編纂

商業會議所條例

定價五錢
郵税二錢

鶴江漁史著

長崎名所案内

摺繪挿入
定價

三百年の昔より支那阿蘭陀の入り込む土地なれば言語風俗名所舊蹟も一風變りし所あり此書を繕けば坐して見物するの利益あらん

近藤安勝編纂

現行稅率諸手數料便覽

定價十二錢
郵税二錢

卷中所載○證券印紙規則○公證人手數料規則○訴訟印紙規則○執達吏手數料規則○登記料並手數料規則○煙草印紙規則○鎖業ニ關スル手數料規則○賣藥印紙規則○酒造稅規則○所得稅規則○醬油稅規則○菓子稅規則○船稅規則○市稅規則○車稅規則○郵便電信料及小爲換料○民事訴訟費用法○賣藥稅追加○鳥獸狩獵規則○牛馬賣買免許稅○土地臺帳規則○海外旅券規則○獸醫免許規則○踏鐵工免許規則○特許條例○登記意匠條例○商標條例
本書ハ現行條例ヲ集録シテ一小冊子トセシ者ニシテ各戶一本ヲ購求シ日常欠クベカラサル良書ナリ

明治廿六年十一月七日印刷
同 年同月十一日發行

定價金壹圓拾錢

著 者 香 月 薰 平
長崎縣長崎市西上町十二番戶

發 行 者 安 中 半 三 郎
同 縣 同 市 酒 屋 町 四 十 四 番 戶

印 刷 者 曲 田 成
東 京 府 東 京 市 京 橋 區 築 地 二 丁 目 十 七 番 地

發 行 所 虎 與 號 商 店
長 崎 縣 長 崎 市 酒 屋 町 四 十 四 番 戶

印 刷 所 東 京 築 地 活 版 製 造 所
東 京 府 東 京 市 京 橋 區 築 地 二 丁 目 十 七 番 地

